

第 337 回 大阪大学臨床栄養研究会(CNC)

日時：平成 25 年 5 月 13 日（月）18:00～19:00

場所：大阪大学医学部 講義棟 2 階 B 講堂（吹田市山田丘 2-2）

テーマ：我が国における小児クローン病の治療の現状

～ 栄養療法に関する話題を中心に ～

演者：大阪府立急性期・総合医療センター小児科 田尻 仁

炎症性腸疾患は、潰瘍性大腸炎、クローン病のいずれも根治療法が存在せず再燃と寛解を繰り返す慢性疾患である。したがって、寛解導入後はいかに長く寛解状態を維持させるかが重要である。

栄養療法は、クローン病治療の寛解導入および寛解維持に重要な役割を担う。小児期発症のクローン病の特徴の一つとして成長障害の合併があり、栄養を十分に補充して成長を促進する必要がある。他の特徴として小児では小腸病変が多く吸収障害を伴うため、栄養療法が治療の中心である。栄養療法には、成分栄養剤（ED）を主に用いる。EDに含まれる種々のアミノ酸は、蛋白の抗原性を除去した窒素源であるとともに、腸管に対して粘膜再生、抗炎症作用を発揮する。クローン病の食事は、低脂肪・低残渣が基本であり、刺激物や不溶性食物繊維を除いた和食主体のメニューとする。不溶性食物繊維は、ごぼう、セロリ、ふき、タケノコなどに多く含まれ、腸管狭窄のある際は腸閉塞を生じるため摂取を避ける。

小児クローン病では、原則として ED による完全経腸栄養療法で寛解導入を行う。重篤な例では、完全中心静脈栄養を一時併用する。クローン病の長期寛解維持には、全摂取カロリーの 50%以上を ED で摂取することが有用である。ED 摂取が困難な患者には各種フレーバーやクエン酸の添加やゼリー化などの工夫などで対応する。

本講演では、クローン病に対する栄養療法の最近のエビデンスとともに、わが国における小児クローン病の現状と課題について紹介したい。

【連絡先】 大阪大学大学院医学系研究科小児科学 三善陽子、大園恵一

TEL：06-6879-3932

E-mail：miyoshi@ped.med.osaka-u.ac.jp

次回、第 338 回 CNC は、老年・高血圧内科 杉本 研先生のお世話で 6 月 10 日（月）開催予定です。